

2/574

蓮如上人御一代聞書抄  
全

019275-000-8

特15-550

蓮如上人御一代記聞書抄

因幡 寬勵 / 著

M24.1

ABF-2907



大

大

大



定牙石

庚寅十有二月謹題

慧燈大阿法語抄之首

為九谷秀暹法契之囑

欣承李傑文旌





蓮如上人御一代記聞書抄

一 勸修寺村の道德、明應二年正月一日、御前へまいり

たるよ、蓮如上人おほせられさふらふ、道德はいくつ

まがるぞ、道德念佛まふさるべし、自力の念佛といふ

の念佛おほくまふして、佛よまいらせ、このまふした

る功德は、佛のたすけ、たまはんずるやうよ、おもふ

て、となふるなり、他力といふの、彌陀をたのむ、一念の

おこるるとき、やがて御たすけよ、あづかるなり、うの、

ち念佛まふすの、御たすけありたる、ありがたさく

ど、おもふころを、よろこびて南無阿彌陀佛くくと

申すばかりなり、されば他力どの、他の力らど、いふこと、ろなり、この一念臨終まで、とをりて往生するなりと、おほせさふらふなり

一 仰よ南無といふの歸命なり、歸命といふの、彌陀を一念たのみ、まいらすること、ろなり、また發願回向といふの、たのむ機よ、やがて大善大功德を、あたへたまふなり、その体すなひち、南無阿彌陀佛なりと、仰候き一聖教を、よくおぼえたりとも、他力の安心を、しかと決定なくば、いたづらごととなり、彌陀をたのむ、ところにて、往生決定と信じて、ふたこと、ろなく、臨終まで、とを

りさふらひ、往生すべきなり

一 仰よ彌陀をたのみて、御たすけを決定して、御たすけの、ありがたさよと、よろこぶこと、ろあれば、そのうれしさよ、念佛まふす、ばかりなり、すなひち佛恩報謝なり

一 大津近松殿よ對とましく、仰られ候信心をよく決定して、ひとよもとらせよと、仰さふらひき

一 仰よ、ときく、懈怠することあるとき、往生すまじきかと、うたがひ、なげくものあるべし、しかれとも、はや彌陀如來を、ひとたひたのみ、まいらせて、往生決定の

のちなれば、懈怠おほくなる、ことのあさましや、かゝる懈怠おほくなるものなれども、御たすけの治定なり、ありがたや、と、よろこぶこゝろを、他力大行の催促なり、と、まふすと、たやせられ、さふらふなり

一 御たすけ、ありたることの、ありがたさよと、念佛まふすべく候や、又御たすけ、あらふずる事の、ありがたさよと、念佛まふすべく候や、と、まふとあげ、さふらふとき、仰まいづれもよし、たゞ正定聚のかたの、御たすけありたると、よろこぶこゝろ、滅度のさとりのかたの、御たすけ、あらうずることの、ありがたさよと、まふ

すこゝろなり、いづれも佛なることを、よろこぶこゝろよと、仰さふらふなり

一 一念の信心を、えてのちの相續といふの、さらば別のことよ、あらず、はじめ發起するところの、安心よ相續せられて、たうとくなる一念のこゝろの、とほるを憶念の心つねよとも、佛恩報謝とも、いふなり、いよく歸命の一念、發起すること、肝要なりと、おほせさふらふなり

一 眞實信心の稱名の、彌陀回向の法なれば、不回向となつてぞ、自力の稱念きらへるゝと、いふの、彌陀のか

たより、たのむころも、とうとや、ありがたやと、念佛  
まふす、ころも、みなあたへ、たまふゆへよ、とやせん、  
かくやせんとは、からふて念佛まふすの、自力なれば、  
きらふなりと、おほせさふろふなり

一 いまのひとの、いまこへを、たづぬべし、またふるきひ  
との、いまこへを、よくつたふべし、物語の、うするもの  
なり、書きたるもの、うせず候

一 法敬坊安心の、とをりばかり、讚嘆するひとあり、言南  
無者の、釋を、いつも、はづさず、ひくひとなり、それさ  
へ、さしよせて、まふせと、蓮如上人御掟候なり、ことハ

すくあゝ、安心のとをり、まふせと御掟なり

一 蓮如上人仰られ候、堺の日向屋の、三十万貫を持たれ  
ども、死したるが、佛よあり候まじ、大和の了妙の、帷  
一つをも、きかね候へども、此度佛よなるべきよと、仰ら

れ、さふらふ由候

一 蓮如上人へ、久寶寺の法性、申され候へ、一念よ後生御  
たすけ候へと、彌陀をたのみ奉り候、ばかりよて、往生  
一定と存候、かやふよ御入候かと、申され候へば、或人  
ときより、うれいつもの事よて候、別のこと、不審な  
ることなぞ、申され候へどと、申され候へば、蓮如上人



仰られ候さぶらふ、それぞとよ、わろきとの、めつらとせきことを、  
 聞きたくおもひ、むりたく思おもふなり、信しんのうへよての、い  
 くだびも、心しん中ちゆうのおもむき、かやふよ、申まさるべきこと  
 なるよ、仰おほられ候さぶらふ  
 一いっ前ぜん々ぜん住ぢゆう上じやう人にん仰おほられ候さぶらふ、かむとへゝるとも、吞のどとらす  
 など云いふことがあるぞ、妻さい子しを帶たい、魚ぎよ鳥てうを服ふく、罪ざい障じやうの  
 身みなりといひて、さのみ思おもひのまゝ、よ、あるまじき由よし、  
 仰おほられ候さぶらふ  
 一いっ心しんよのみ奉たてつる機き、如にょ來らいの、よく、ころとめすなり、  
 彌み陀だのたゝ、ころとめすやうよ、心しん中ちゆうを、もつべと、冥みやう加か

をおろろしく、存ぞんずべきことよて候さぶらふとの、義ぎよ候さぶらふ  
 一いっ同どう仰おほられ候さぶらふ、凡ぼん夫ぷ往わう生じやうたゝたのむ一念ねんよて、佛ぶつよなら  
 むことあらば、いかなる御ご誓せい言げんをも、仰おほせらるべき、證しやう  
 據こ、南なん無む阿あ彌み陀だ佛ぶつなり、十じゆう方ぽう諸しよ佛ぶつの證しやう人にんよて候さぶらふ  
 一いっ信しんもなくて、人ひとよ信しんをとれよ、と申ます、わが物ものも  
 たずとて、人ひとよ物ものを、とらすべきといふの心こころなり、人ひと承しやう  
 引いんあるべからずと、前ぜん住ぢゆう上じやう人にん仰おほられ候さぶらふ、自じ信しん教けう人にん信しん  
 と候さぶらふとき、まづわが信しん心しん決けつ定ていして、人ひとよも教おして、佛ぶつ恩おん  
 よなるとの、ことよ候さぶらふ、自じ身しんの安あん心しん決けつ定ていして、教おしる、則すなわ  
 ち大だい悲ひ傳でん普ふ化けの、道だう理りなる由よし、同どうく仰おほられ候さぶらふ

一 君を思ふは、われを思ふなり、善知識の仰は随ひ、信をとれは、極樂へ参るものなり

一 前々住上人仰られ候、彌陀をたのめる人の、南無阿彌陀佛は、身をば、まるめたる事なりと、仰られ候と云云

いよゝ冥加を、存すべきの由は候

一時節到來と云こと、用心をもして、そのうへは事の出來候を、時節到來とい、云べし、無用心にて、事の出來候を、時節到來とい、いぬ事なり、聽聞を心かけての、うへの宿善、無宿善とも、云事なり、たゝ信心の、きくまきはまることなる由、仰の由は候

一 何ともして、人よなをされ候やうは、心中を持つて、わが心中をば、同行の中へ、うち出しておくと、下々たる人の、いふことをば、用ひずして、必ず腹立するなり、あさましきことなり、たゞ人よなをさるゝやうは、心中を持つべき義に候

一 前々住上人仰られ候上下老若よよらず、後生の油斷よて、しるんずべきの由、仰られ候

一 一宗の繁昌と申すは、人の多くあつまり、威の大なることよて、いなく候一人なりとも、人の信を取が、一宗の繁昌は候然れば、専修正行の繁昌は、遺弟の念力よ

り成なりずと、あそびされ、をかれ候まはら

一、一句一言を、聽聞きこするとも、た、得手たてよ、法ほをきくなり  
た、よく聞き、心中しんちゆうのとをりを、同行どうぎやうよあひ、談合だんがふすべ  
き、ことなりと云云うんぬん

一、くちと身みのはたらきとは、似にするものなり、心こころねがよ  
くなり、がたきものなり、涯分心かいはんこころのかたを、たしなみ申ま  
すべき、ことなりと云云

一、王法わうほふは額ひたいよあてよ、佛法ぶつほふの内心ないしんよ深く蓄たくはへよとの仰おほせ  
候まはら、仁義にぎぎと云事いふことも、端正たうていあるべき、ことなるよし候まはら  
一、同行善知識どうぎやうぜんちしきよ、能よく々よくちかづくへし、親近しんこんせざる、雑ざつ

修しゆの失うなりと、禮讚らいさんよあらひせり、惡あくきものよ、ちかづ  
け、づれよ、ならぶと思おもへども、惡事あくじよりくよあ  
り、只佛法者ただぶつほふしやよ、馴なれちかづくべきよ、仰おほせられ候まはら俗典ふくでん  
よ云いく、人ひとの善惡ぜんあくの、近習ちかづまらふよよると、又またうの人ひとを知しん  
とおもひは、その友ともをみよといへり、善人ぜんじんの敵てきといな  
るとも、惡人あくじんを友ともとすることなかれと、いふ事ことあり  
一、凡夫ぼんぷの身みよて、後生ごじやうたすかること、た、易やすきと、バカ  
り思おもへり、難中なんちゆう之難なんとあれ、輒たやすおこと、がたき信しんなれ  
ども、佛智ぶつちより易得成就えやすくじやうじゆとたまふ事ことなり、往生わうじやうほどの  
一、大事だいじ、凡夫ぼんぷの、いからふべきよ、あらずといへり、前住ぜんぢゆう

上人仰しやうじんよ、後生ごじやう一大事だいじと存ぞんずる人ひとよの御同心ごどうしんあるべきよと、仰おほせられ候さかちかと云い云ん

一 蓮れん如にょ上人しやうじん、おりにくく仰おほせせられ候さかちか佛法ぶつぽうの義ぎをば、よくくく人ひとよとへ、物ものをば人ひとよよくとひ申まをせの由よし、仰おほせられ候さかちか、誰たれよとも申まをべき由よし、うかひ申まをければ、佛法ぶつぽうたよもあらば、上下じやうげをいはずとふべと、佛法ぶつぽうの、とりうも、なきもの、が、とるずと仰おほせせられ候さかちかと云い云ん

一人ひとの、あがりくく、て、おちををくらぬなり、たゞつゝとみて、不ふ断だんそらおろるときあとし、毎まい事じよ付つて、心こころをもつべきもの由よし、仰おほせられ候さかちか

一 御文ごふみの、これ凡夫ぼんぷ往生じやうじやうの鏡かみなり、御文ごふみの上うへよ、法門ほふもんあるべきやうよ、思おもふ人ひとあり、大おほなる、あやまりなりと云い云ん

一 信しんの上うへの、佛恩ぶつおんの稱名しょうめい、退轉たいてんあるまじきことなり、或あるは心こころより、たうとく、あり難がたく、存ぞんずるをば、佛恩ぶつおんと思おもひ、たゞ念佛ねんぶつの、申まをされ候さかちかをば、それほども、思おもはざるおと、大おほなる誤あやまりなり、自念佛おのづからねんぶつの、申まをされ候さかちかころ、佛智ぶつちの御おんもよほし、佛恩ぶつおんの稱名しょうめいなれと、仰おほせ事じよ候さかちか

一 蓮れん如にょ上人しやうじん、仰おほせられ候さかちか、信しんのうへ、たうとく思おもひて申まをす念佛ねんぶつも、又またふと申まをす念佛ねんぶつも、佛恩ぶつおんよ備そなはるなり、他宗たしゆよの親おやのためなんぞ、て、念佛ねんぶつをつかふなり、聖人しやうじんの御ご一

流りゅうの彌陀みだをたのむが念佛ねんぶつなり、そのうへの稱名しょうみやうの、  
 なよともあれ、佛恩ぶつおんよなるものなりと、仰おほせられ候まうら云云  
 一、同仰おなしくおほせられ候まうら、當時まうらおとほにて、安心あんしんのどをり、同おなやふ  
 よ申まをされ候まうらひと、然しかれば信決定しんくわていの、人ひとよ紛まごれて、往生わうじやうを、  
 とそんずべきことを、かなとく思召おほしめしめ候まうら由よし、仰おほせられ候まうら  
 一、聖人しやうたんの御流ごりゅうの、たのむ一念ねんの所ところ、肝要かんえうなり、故ゆゑよたのむ  
 と云いふことを、代々だいだいあそばしをかれ候まうららへども、委くはく  
 何なにとたのめど、いふことを知らざりき、然しかれ、前々ぜんぜん住上ぢゆうじやう  
 人まんの御代ごだいよ、御文ごぶんを御作ごさくり候まうらて、雜行ざぎやうをすて、後生ごじやうた  
 すけたまへと、一心しんよ彌陀みだをたのめど、あきらかよと

らせられ候まうら、然しかれ、御再興ごさいこうの上人じやうたんよて、ましますものな  
 り  
 一、行ぎやうさき、むかひばりみて、足あしもとをみねの、踏ふみかふる  
 べきなり、人ひとの上うへばかりみて、わがみの、うへのことを、  
 たしなますば、一大事だいじたるべきと、仰おほせられ候まうら  
 一、人ひとよ佛法ぶつぽふのことを申まをて、よろこばれば、されのうのよ  
 ろこぶ人ひとよりも、なをどうとく、思おもふべきなり、佛智ぶつちを  
 つたへ申まをすよよりて、かやうよ存ぞんせられ候まうら事ことと思おもひ  
 て、佛智ぶつちの御方ごかたを、有難ありがたく存ぞんせらるべしとの、儀ぎよ候まうら  
 一、御文ごぶんをよみて、人ひとよ聽聞てうもんさせんとも、報謝ほうしゃと存ぞんすべし、

一句一言も、信の上より申せば、人の信用もあり、又た  
報謝ともなるなり

一、同仰おなむねよ云、心得こころえたと思ふおもひ、心得こころえぬなり、心得こころえぬと思ふ  
ひ、こゝろゑたるなり、彌陀みだの御おんたすけ、あるへきこと  
の、たうとさよと思ふおもひが、心得こころえたるなり、少すこも心得こころえたる  
と、思ふおもひことひ、あるまじきことなりと、仰おほせられ候され  
ひ口傳くつでん鈔しやうよ云、さればこの機きの上うへよ、たもつところの、  
彌陀みだの佛智ぶつちを、つのりと、せんよりほかひ、凡夫ぼんぷいかで  
か、往生おうじやうの得とく分ぶん、あるべきやといへり  
一、信しんをば得えずして、よろこび候さひんと思ふおもひこと、たとへ

ハ糸いとよて物をぬふよ、あどをうのまゝよて、ぬへば、ぬ  
け候さやうよ、悦よろこ候ほひんとも、信しんをゑぬひ、いたづらごと  
なり、よろこべ、たすけたまひんと、仰おほせられ候さことよて  
も、なく候さたのむ衆生しゆじやうを、たすけたまひんとの、本願ほんがんよ  
て候さ

一、人ひとの辛勞しんらうもせで、徳とくをとる上品じゆんぴんひ、彌陀みだをたのみて、佛ぶつ  
よなるよ、すぎたることなると、仰おほせられ候さと云い云い  
一、皆人みなひと毎ごとよ、よきことを云いひも、働はたらもすることあれば、  
眞俗しんぞくともよ、それを、わがよき者ものよ、はやなりて、ろの心こころ  
よて、御恩ごおんと云いことば、うちわすれて、わが心こころ本もとよなる

よよりて、冥加よつきて、世間佛法ともよ、悪き心が必ずく出来するなり、一大事なりと云云

一、信決定の人の佛法の方への身をかるくもつべし、佛法の御恩をば、おもく、うやまふべしと云云

一、彌陀をたのめば、南無阿彌陀佛の主なるなり、南無阿彌陀佛の主よ成るといふの信心をうることなりと云云、又當流の眞實の寶と云ふの、南無阿彌陀佛、これ一念の信心なりと云云

一、一流眞宗の内よて、法をそとり、おろさまよいふ人あり、是を思ふよ、他門他宗のことい是非なし、一宗の中

よ、かやうの人もあるよ、われら宿善ありて、この法を信する身の、とうとさよと、思ふべしと云云

一、愚者三人よ、智者一人とて、何事も談合すれば、面白きことあるぞと、前々住上人、前住上人へ、御申候、是佛法の方よ、いよく、肝要の御金言なりと云云

一、人の、そらごと申さじと、嗜むを随分とこそ思へ、心よ偽りあらんと、嗜む人の、さのみ多くい、なき者なり、又よき事い、ならぬまでも、世間佛法ともよ、心よかけ、嗜みたきことなりと云云

一、佛法を、すかさるかゆへよ、嗜み候はずと、空善申され

候へば蓮如上人仰られ候、それの、このまぬの、きらは  
 まていなきかど、仰られ候と云云  
 一、坊主の、人をさへも、勸化せられ候よ、我身を勸化せら  
 れぬの、あさましきことなりと云云  
 一、身あと、かなれば、ぬふりきざと候、あさましきこと  
 なり、その覺悟よて、身をもすゞしくもち、眠をも、さま  
 すべきなり、身隨意なれば、佛法世法ともよ、をこたり、  
 無沙汰由斷あり、此義一大事なりと云云  
 一、信を得たらば、同行よ、あらく物も、申まじきなり、心和  
 ぐべきなり、觸光柔輦の願あり、又信なければ、我よな

りて、詞もあらく、諍ひも、必ず出来るものなり、あさま  
 しく、能やく、ころうべしと云云  
 一、蓮如上人仰られ候、世間佛法ともよ、人の、かろくと、  
 とたるがよきと、仰せられ候、黙したるものを、御さら  
 ひ候、物を申さぬが、ころきと仰られ候、又微音よ物を  
 申を、あろしと仰られ候と云云  
 一、同仰よ云く、佛法と世體との、たしなみよよると、對句  
 よ仰られ候、又法門と庭の松との、いふよあがると、こ  
 れも對句よ仰られ候と云云

蓮如上人御一代聞書抄終 (合て五十三箇條なり)



2E-35

明治廿四年一月十二日印刷  
同年同月二十五日出版

定價金二錢五厘

新潟縣平民

著者兼  
發行者

因幡寬勵

東京市淺草區北清  
島町百五番地寄留

印刷者

高坂界雄

同市同區同町同番  
地寄留

發行所

眞宗法話會

同市同區同町同番地